

平成27年3月6日(金)

老球の細道124号

日本一の下足番

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

新春の進学、就職シーズンも真近、新しい門出が待っている。新入社員に贈る言葉として有名なのが阪急・東宝グループの創業者である小林一三氏の次のような言葉である。

「下足番を命じられたら、日本一の下足番になってみる。そうすれば誰も君を下足番にしてはおかぬ」

どんな環境に置かれていても不平不満を言わずに結果を出す。そんな人にこそ、チャンスは巡ってくるというメッセージである。

ちなみに〈下足番〉とは、人が脱いだ履き物を預かり、その番をすること。またその人。とくに寄席(よせ)、料亭などで屋号を染め抜いた印半纏(しるしばんてん)を着て客の下駄(げた)番をする人のことをいう。

小林一三氏の〈日本一の下足番〉の話は、織田信長の草履取りから出世した豊臣秀吉の逸話をもとにしている。太閤まで昇り詰めた豊臣秀吉の人生には誰もがあこがれる。しかし、大坂城に天下を睥睨する秀吉を知っている、厳冬の軒下に忍耐強くうずくまっていた草履取りの藤吉郎は忘れられがちである。

前触れなしに、夜中でも明け方でも床をけて飛び出す信長の草履を預かる仕事は、決して楽なものではなかったと思われる。四六時中、信長の動静を注意深く見守り、とっさの外出に応ずるだけの態勢が必要であった。信長がいつ何どき玄関へ飛び出してもいいように、藤吉郎が信長の草履を懐に暖め、軒下に犬のようにうずくまっていた。秀吉(藤吉郎)は信長の足が冷えて風邪をひかないようにと、いつも信長の草履を胸の中に抱いて温めていたと言われる。

後に、豊臣秀吉の軍師の一人、黒田官兵衛が、太閤となった秀吉にたずねた。

「殿下は信長公の草履取りあった頃から、今日あるを予期しておられたか？」
すると、秀吉は次のように語った。

「貴公のような知恵者が何をいわれるか。ワシは、太閤になろうなどとは思ったことはない。草履取りの時は草履取りを一心に努めた。その頃は、ただ、ただ、天下一の草履取りになりたいと努力しただけだ。そしたら足軽に取り立てられた。ありがたいことだと一生懸命仕えたら侍になった。侍の仕事に夢中になっているといつしか侍大将になっていたのだ。ついに姫路一城を拝領するに至った。ワシは一職を得れば一職、一官を拝すれば一官、その職官に没頭して今日に至ったのだ。ほかに出世の秘訣は何もない」

目の前の仕事に向き合い、ひたむきに取り組んで結果を残す。そうすれば、次の道が見えてくる。一番辛い仕事を与えられたなら、その仕事をマスターして、誰をも凌ぐ実力を手にすればよいのだ。現実を受け入れ、その中で自分自身に挑戦していくしかない。

「努力は才能を凌駕する」をテーマに立ち向かった現職コーチ時代、残念ながらミラクルは起こせなかった。まだまだ愚直な努力が不足していた。〈日本一の下足番〉になりきれていなかった。

新しい挑戦の場で多少理不尽な境遇にあっても「何でこの俺が!？」と嘆くまい。「よし!この俺が何とかする!」と立ち上がろう。そういう人生の方が、ずっと面白いはずだ。